

※当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

【研究会報告】

AA 研共同利用・共同研究課題「南アジアの社会変動・運動における情動的契機」

2020 年度第 2 回研究会「南アジア研究における情動の諸相」

日時：2020 年 11 月 8 日（日）13:00-16:30

会場：ZOOM 会議

共催：FINDAS（東京外国語大学南アジア研究センター）

参加人数：28 人

プログラム：

◆太田 信宏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

「マيسール藩王国における王権の感情化とその起源」

“Emotionalization of Kingship and its Provenance in the Princely State of Mysore”

◆井田克征（中央大学）

「中世マハーラーシュトラの聖者伝における感情と救済」

“Emotions toward to the salvation in hagiographies of medieval Maharashtra”

〈研究会概要〉

「南アジア研究における情動の諸相」としての第 2 回目研究会であり、歴史研究、宗教研究の分野から「情動」にフォーカスした 2 つの報告が行われた。イギリス近代史を専門とし、ヨーロッパにおける感情史に詳しいコメンテーターを招いた。

【報告①】

太田 信宏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

「マيسール藩王国における王権の感情化とその起源」

“Emotionalization of Kingship and its Provenance in the Princely State of Mysore”

本報告では、主にイギリス植民地期の南インド・マيسール藩王国においてカンナダ語で編纂された藩王チャーマ・ラージャ 10 世の伝記『チャーマ・ラージャ伝(Śimgrayya. Śrīmanmahārājādhīrāja Śrī Cāmarājēndra Oḍeyaravara Caritre)』（初版 1905 年）をもとに、王と「臣民」との関係や王の言動が、感情や情緒にいろどられて表象される様子を取り上げられた。この伝記の特徴として、王には「思いやり」が必要であることが重視された点や、

それまでの伝統では描かれることのなかった王の「悲しむ姿」が頻繁に描かれている点が挙げられ、王が臣民に対して「思いやり」という一種の「共感」の感情を示すことが重視された背景には、近代に相応しく変容しようとする王権の新たな存在基盤の模索や、新たな価値と文化の体現者としての在り方の模索が影響していたのではないかと指摘された。また、「悲しむ王の姿」が描かれるようになった要因としては、「王が悲しむ」ということに対する著者（文学的象徴としての「王」の作り手）、および社会（文学的象徴としての「王」の受け手）の価値づけが変化したことが影響しているのではないかと、この見解が示された。

【報告②】

井田克征（中央大学）

「中世マハーラーシュトラの聖者伝における感情と救済」

“Emotions toward to the salvation in hagiographies of medieval Maharashtra”

本報告では、マハーラーシュトラにおいて14世紀に編纂されたマハーヌバーヴ派の聖者伝および初期教理書と、ワールカーリー派の伝記編纂者 Mahipati が18世紀に著した聖者列伝を、①死と救済、悲嘆と歓喜、②欲望という観点から比較した。その上で、こうした宗教書において化身を取り巻く人々が化身の死や自らの救済に直面する場面で描かれる情動を「救済論」の観点から捉えたとき、その情動は読者である後代の信徒たちにとって単に規範的に作用するだけではなく、読み手一人一人の内に生じる感情（ラサ）そのものが重要な意味をもつのではないかと、つまり聖者伝の中の様々なエピソードを vibhāva（感情を喚起する条件）と解釈できるのではないかと、この見解が示された。両派の違いとして、感情的な揺れ動きもあれば失敗もする聖者像を示し、帰依の対象となる神性を必ずしも「完全な」ものとは考えていないマハーヌバーヴ派に対し、Mahipati は神性の完全性を強調する点が挙げられた。また、欲望や聖者の死に対する感情表現も異なり、Mahipati の聖者列伝のほうが聖者のあるべき姿を教条的に捉える傾向があることが指摘された。こうした差異は宗派の違いによるものなのか、または時代的なものなのかの検証が、今後の課題として挙げられた。

報告後、コメンテーターの伊東剛史氏より、ヨーロッパ史における情動研究の動向が紹介された。その上で、君主が感情を持ったものとして描かれるようになったことに諸外国からの影響はどれだけあったのか、聖者伝からは感情の身体性や物に感情を託すような感情の物質性を掘り上げていくことは可能なのかなどといった指摘や着眼点が提示され、報告者・参加者を交えて、特に「ラサ」論について活発な議論が行われた。